

景気下降局面における広告表現の戦略について
～言語ゲーム論の観点から～
橋爪大三郎

□0 □講師紹介……はしづめ だいさぶろう

1948年 神奈川県生まれ。

1977年 東京大学大学院社会学研究科博士課程修了(社会学専攻)

1989年～ 東京工業大学工学部助教授(社会学)

主な著書……「言語ゲームと社会理論」(勁草書房)「仏教の言説戦略」(勁草書房)
「はじめての構造主義」(講談社現代新書)「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)
「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館・近刊)など。

□1 □言語ゲームとは何か

* ヴィトゲンシュタイン (L. Wittgenstein 1889-1951) ユダヤ系の哲学者、思想家。バートランド・ラッセルのもとで学び、「論理哲学論考」(前期の主著)を著す。40歳ごろから哲学に復帰、ケンブリッジで個人的なゼミを行なう。遺稿となった後期の主著「哲学探究」では、言語ゲーム (language game, Sprachspiel) のアイデアをのべ、英米系の現代哲学に大きな影響を与える。

* 社会 (人間の相互行為がおりなす秩序) は、言語ゲームの集積として理解できる。

- ①無根拠仮説 言語ゲームには、最終的な根拠がない 遂行的(performative)
- ②対応仮説 言語ゲーム (暗黙) ⇔ ルール (積極的)
- ③複合仮説 言語ゲームは、互いに関係することができる

言及：一次ゲーム～二次ゲーム ex. 社会一般～法のある社会
包含：部分ゲーム～拡大ゲーム ex. 小乗仏教～大乘仏教

②・③を積極的にのべる立場が、言語ゲーム論である。

□2 □経済とはどういうゲームか

* 交換……コミュニケーションの一種。人間はコミュニケーション (交換・交流) をする存在である [構造人類学の基本テーゼ]。

交換の媒体 ・女性～親族
・言語～神話 } これらの交換を通して、目に見えない資源 (社会的
・物財～経済 } 威信や権力) も分配される。

* 市場……貨幣をメディア (交換の媒体) とするゲーム

貨幣：交換の一般的手段 $W-G-W'$ ⇨ 物神性 ($G-W-G'$) を帯びる
一般：どんな商品と、いつでも誰でも交換できること。→非人称性 (抽象性)

市場において、人間の「欲望」が可能になる。欲望……他者に対する働きかけ

* 資本主義経済……生産要素 (特に労働力、資本) の市場が完全に成立し、生産活動が、合理的に行なわれるようになった経済

企業 (生産者) / 家計 (消費者) / …… ⇨ ワルラスの一般均衡モデル
資本主義経済において、純然たる生産者と消費者が登場する。ここに広告の必然がある。

消費=貨幣投票 (信任行為) 生産活動は、消費と切り離されているため、それが経済の不可欠の一部であったことを事後的に承認されないとはいけない。

* 公共部門 (国家) との接合

ケインズ……安定因子として、市場に外在しつつ経済に内属

社会主義……合理的な計画主体として、市場を超越し、経済主体をコントロール
分権的なシステムである市場は、社会全体となれない

□3 □広告とは何なのか

* 広告の特徴 ①一般性 (多くの人の目にふれる)

②無料 (情報であるのに、有料でない) →コスト：消費者のあと払い

③新奇性 (商品も、広告も、新しくなる) (企業の先払い)

* 広告の記号論 (略) 消費社会と広告 (略)

* 広告のひとり歩き

⇨ オースティンの発話行為論

広告は、「X社は「商品Yはyである」と広告している」という遂行的な構造をもつ
(広義の (狭義の広告) 広告) (広告の文脈依存性)

⇨ 広告は、商品Yに関する情報以外に、文脈に応じた多様な情報を放射する

例：X社は、「 」のようなダサイ広告をするダサイ会社である

X社は、「 」のような金のかかる広告をする、金のある会社である

発展型：“X社は、Zが「商品Yはyである」と広告する、ようにさせている”

Z：代理店、クリエイター、……

広告それ自体もまた商品。→広告も景気循環と同調するのはやむをえない

* 広告の情報戦略

企業 —— 商品 —— 消費者 消費者は、企業の存在理由 (文化) を含めて、商品を購入したい (×欲望モデル ×利潤モデル)
情報
(広告) ⇨ 企業は、広告を含めた対社会的な言語戦略

について、自覚的である必要がある

□4 □広告はいま、何ができるか

* 元気の出る広告は、可能なのか

売上を伸ばす広告 [他社と差をつける……いつでも可能 ⇨ 全体では首をしめる
全体のパイを大きくする……景気と同調 ~大きな文脈 (大塚)

広告が経済 (景気循環) を作るのではない →限界あり

* 景気後退期の広告戦略 Cf. 研究開発投資、省力化投資、組織点検、合理化

①つぎの好況期の広告は、この前と変わるはず →野心的広告を (才能発掘)

②基本にかえて、底堅い広告 「信頼」：企業と消費者の永遠の結びつき

③長期トレンド、未来展望型の広告 人材確保

④社会的責任を自覚した広告 不況だからといってケチらない～責任の自覚
もう一ランク上のイメージをめざすには、これしかない

□0 講師紹介 (はしづめ だいさぶろう) 専攻・社会学

1948 神奈川県生まれ

1972 東京大学文学部社会学科卒業

1977 東京大学大学院社会学研究科博士課程修了

1989- 東京工業大学工学部助教授 (社会学)

既刊……「言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン——」

「仏教の言説戦略」(勁草書房) (勁草書房)

「はじめての構造主義」(講談社現代新書)

「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)

「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)

新刊……「フェミニズムの主張」(共著・勁草書房)

「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)

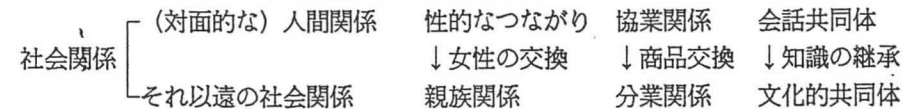
近刊……「現代の預言者・小室直樹の学問と思想」(副島隆彦氏との対談・弓立社)

「21世紀を生き始めるために③~⑤」(JICC出版局)

他に、竹田青嗣さんとの対談集、「ル・クール」連載「社会科学院」など

□1 コミュニケーションとしての社会

1) 社会：複数の人間が集まって形成される社会関係 (=コミュニケーション) の集積



Cf. レヴィ=ストロースの「コミュニケーションの一般理論」：社会は、女性/言語/物財をめぐる三重の交換 (=交流=コミュニケーション) のシステムである。

2) 社会(科)学：社会関係のパターン (=社会構造) を解明する

- ・ 経済学~市場での商品交換を通じて形成される秩序を研究 メディア：貨幣
- ・ 政治学~政治制度を通じて形成される意思決定の構造を研究 メディア：権力
- ……

・ 社会学~社会関係の可能性について一般的に研究 関係のパターン：性/権力/言語

3) メディアは社会関係を拡大させる ← パーソナルズ、ルーマン

- ・ マルクスの商品論は、メディアによる社会関係の拡大を先駆的にとりあげた
- W-W' : 使用価値と交換価値 (物々交換=対面関係) → 価値
- W-G-W' ; 貨幣 価値を体化した商品~交換の手段~物神性 ⇨ 市場
- G-W-G' : 資本 価値増殖を自己目的とする運動 ⇨ 資本主義
- G : 貨幣 W : 商品

- ・ メディアの社会的特性
- ①それを生み出した人間の身体を離れても、②それ独自の社会的な形象として実在し、
- ③誰に対しても一様に効果をもつ。

4) メディアの転態の例

(1)口頭言語 →文字(書字行為) →印刷(活字メディア) →電波(放送メディア)

(2)現物貨幣 →象徴貨幣 →書記貨幣(兌換券) →喩としての貨幣(預金通貨)

……

5) メディアとともに、表現の可能性も拡大する

表現：身体の外部に、ある人間個体の精神内容を外在させること

単純な表現……身体の挙動を外からみて、そこに精神内容を看取する 表情；手振り

固有の表現……形式化されたメディアが介在している ⇨ 作品 感情表現；手話

作品~表現行為の現場や表現者と切り離されても、表現としての独自の構造を保つ

精神が存在したこと(表現であること)の証明……自然現象としてたとえ可能でも生起確

率のきわめて低い出来事(分布の偏り) Cf. ルロワ=グーラン「身ぶりと言語」

6) 表現の制度

オリジナリティ(独創性)を追求するゲーム……誰が新しいアイデアを出したか、新し

い手法を成功させたかという系譜を、作品の系統樹のかたちで共有する

クラシック←→アヴァンギャルド

□2 社会を元気にする表現戦略

1) なぜ元気が出ないのか

元気……やりたいことをやっている+自分の可能性が発揮できている+他者の承認が

えられる+無理をしていない(ずっと続けていかれる) ~生命の充実

元気が出ない……このどれかが満たされていない

2) マルクスの疎外論 単純労働が増えていく(やりたくない&可能性は発揮できない

&仕事は他と置き換え可能)

賃労働者は、資本家のもとで働いても元気が出ない 共産党のもとで元気が出る

3) 官僚制(マックス・ウェーバーの合理化=近代化論)

官僚制：組織が上位の主体性を獲得して、その主体性を分割し、下位の主体(従業員)

に分担させること(下位の主体性は制限される)

権限/責任の原則、文書主義、……

①組織目的が明瞭であり、②組織外から支持と理解がえられていれば、従業員のやる

気(モラル)は高くなる(給与はあまり関係ない) cf. 軍隊

4) 競争市場と官僚制の混合としての、近代社会

分権的競争市場……同業他社がいる(新規参入)~倒産の可能性

集権的官僚制……システムティックな課題の解決 資本→経営・技術

5) 機能集団が共同体に転化する(山本七平=小室直樹の定理)

プラス面 ①“社会(組織)リテラシー”を向上させなくても、動機を調達できる

↳ (労働の神聖化)

マイナス面①上位の主体性を破壊する ×公共性

②個人の自律性を破壊する ×自由

6) 組織の二律背反： 予測可能性 vs. 個人の自発性(元気)

組織の骨格(予測可能であるべき部分)を限定し、個々人をinvolveする

度合いを漸減させる “社内退社” “社内入社” “副専業”、……

7) 労働の無名性(匿名性)←→作品行為の固有名性

すべての労働を作品化することはできない。そこで、

①意味の全体的秩序をよく理解する。私企業の「公共」的(全社会的)な意味連関

を追えるようにする(そうした連関は必ず追える)。

②企業内の職種に特化しないで、それから距離を置いて自分の存在・自分の仕事を考

えられるようにする。⇨契約社員/輪番制/半週社員/ジョブ・シェアリング&c

→資本主義的企業(機械制工場生産)モデルから、単純商品交換(職人)モデルへ

□0□ 講師紹介

はしづめ だいさぶろう 1948— 社会学専攻。東京大学大学院博士課程修了。
1989年より東京工業大学助教授。主な著書……「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればいいのか」(以上、勁草書房)「はじめての構造主義」(講談社現代新書)「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)共著書……「小室直樹の学問と思想」(弓立社)「試される言葉」「照らしあう意識」(以上、JICC出版局)

□1□ 国連と、冷戦以後の世界

- (1) 近代国家とは何か 国家主権・絶対・最上・無制限 (=神の主権)
・国家は暴力を独占する 警察&軍隊 ・国家は戦争をすることができる
- (2) 戦争と平和 平和:戦争のないこと いかん戦争を抑止するかが問題
列強の抗争→軍事同盟→連鎖反応で世界大戦→国際平和機関(国際連盟、国際連合)
- (3) 国際連合とはなにか UN=連合(←枢軸国):対日独線を戦った国家の連合
総会 一国一票 多数決 演説ばかりで大した権限なし
安全保障理事会 五大国(常任理事国) 拒否権 国連軍を組織する
- (4) 国際法とはなにか 例:第二次世界大戦、湾岸戦争、…… 国家主権をどう制限?
国内法との違い……①制裁が絶対的でない、②慣習法が中心、③大国の役割が大
- (5) PKO活動とは何か 危ない目にあってる人民をどう助けるか! 応急措置
主権国家の一時的解体→人民の生命・財産の危機→国際機関等による主権の代行
日本がPKOに参加するようになったのはよいことだが、自衛隊の合法性?がネック

□2□ 戦後日本と自衛隊

- (1) 日本国憲法～占領下でわか作り 平和主義←非武装、戦争放棄 小さな敗戦国
- (2) 自衛隊の誕生 冷戦の激化で米の対日政策変化・中国の共産化・朝鮮戦争
軍隊でない(建て前)⇒法制度、モラル、世論の支持、などが欠如
- (3) 日米安保条約 講和条約(独立)とワンセット 超大国との軍事同盟→平和
60年、70年安保闘争～非現実的な左翼運動 ←現実的な自民党の政策に世論の支持
- (4) 冷戦の終結と自衛隊 ソ連の解体にともない、自衛隊の通常戦力は過剰に
米の対日要求の変化 防衛力整備→シーレーン防衛→米軍経費分担→湾岸戦費

□3□ カンボジア和平と、自衛隊のPKO活動

- (1) ベトナム戦争とは何だったか 戦争ではない戦争～アメリカの凋落
社会主義圏の拡大→封じ込め、ドミノ理論→民族解放戦争→正規軍の介入
- (2) カンボジア四派のどろ沼抗争 米・ソ・中・越の思惑で各派ゲリラが抗争
シアヌーク政権(ホーチミン・ルート容認)→親米ロン・ノル政権→ポル・ポト政権(クメール・ルージュ)→ヘン・サムリン政権(ベトナム寄り)→四派和平(カンボジア和平暫定評議会～国家主権)→選挙による新政権
- (3) 自衛隊派遣の法的問題 自衛隊は、国外での活動を予想していなかった
戦争時:戦時国際法、軍法の適用 PKO:国連の指揮下で組織として活動

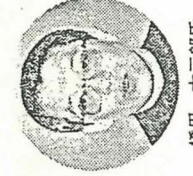
□4□ ポスト冷戦の国際環境と、日本の選択/世界の選択

- (1) 冷戦時代の枠組みが解体し、つきを模索する時期 アメリカ一極=多極世界
国連、NATO、経済サミット、…… EC? アジアの新しい枠組み?
- (2) 自衛隊派遣に反対していれば済むのか? Cf.ドイツは戦後処理をきちんとやった
日本の中長期的な世界「戦略」を提出すべき その一環としての安全保障政策

誰にも聞かぬ心

民主主義は最高の政治制度である
橋爪大三郎著
橋爪大三郎・副島隆彦著
現代の預言者 小室直樹の学問と思想
ソ連崩壊はかく叫ばれた

橋爪大三郎氏
橋爪大三郎氏
橋爪大三郎氏



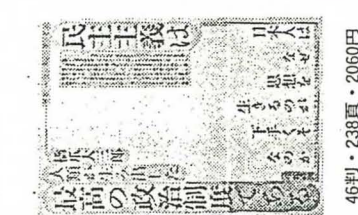
橋爪大三郎氏
橋爪大三郎氏
橋爪大三郎氏

「民主主義は最高の政治制度である」(橋爪大三郎著)は、橋爪大三郎氏の著書である。この書は、民主主義の歴史、理論、実践について、橋爪氏の独自の視点から論じている。橋爪氏は、民主主義が単なる政治制度ではなく、人間の尊厳と自由を守るための道徳的基盤であると主張している。また、冷戦時代の国際情勢や、ソ連の崩壊といった歴史的変遷の中で、民主主義の重要性を強調している。本書は、現代の政治状況や国際貢献の議論に、重要な示唆を与えている。

「民主主義は最高の政治制度である」(橋爪大三郎著)は、橋爪大三郎氏の著書である。この書は、民主主義の歴史、理論、実践について、橋爪氏の独自の視点から論じている。橋爪氏は、民主主義が単なる政治制度ではなく、人間の尊厳と自由を守るための道徳的基盤であると主張している。また、冷戦時代の国際情勢や、ソ連の崩壊といった歴史的変遷の中で、民主主義の重要性を強調している。本書は、現代の政治状況や国際貢献の議論に、重要な示唆を与えている。

橋爪大三郎氏は、民主主義の歴史、理論、実践について、独自の視点から論じている。橋爪氏は、民主主義が単なる政治制度ではなく、人間の尊厳と自由を守るための道徳的基盤であると主張している。また、冷戦時代の国際情勢や、ソ連の崩壊といった歴史的変遷の中で、民主主義の重要性を強調している。本書は、現代の政治状況や国際貢献の議論に、重要な示唆を与えている。

橋爪大三郎氏は、民主主義の歴史、理論、実践について、独自の視点から論じている。橋爪氏は、民主主義が単なる政治制度ではなく、人間の尊厳と自由を守るための道徳的基盤であると主張している。また、冷戦時代の国際情勢や、ソ連の崩壊といった歴史的変遷の中で、民主主義の重要性を強調している。本書は、現代の政治状況や国際貢献の議論に、重要な示唆を与えている。



橋爪大三郎氏は、民主主義の歴史、理論、実践について、独自の視点から論じている。橋爪氏は、民主主義が単なる政治制度ではなく、人間の尊厳と自由を守るための道徳的基盤であると主張している。また、冷戦時代の国際情勢や、ソ連の崩壊といった歴史的変遷の中で、民主主義の重要性を強調している。本書は、現代の政治状況や国際貢献の議論に、重要な示唆を与えている。

□0□ 講師紹介

はしづめ だいさぶろう ……1948年神奈川県生まれ。1977年東京大学大学院社会学研究科修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。

主な著書……「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればよいのか」(以上、勁草書房)、「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)、「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)、「小室直樹の学問と思想」(弓立社)、「試される言葉」「照らしあう意識」(以上、JICC出版局)ほか。

□1□ 教会とは何か

- (1) 教会は、キリスト教に特有の制度である。 ←ユダヤ教、イスラム教
 - ・終末&審判 (=イスラム教=ユダヤ教)
 - ・個別救済 (=イスラム教≠ユダヤ教)
 - ・聖/俗の二元論 (=イスラム教、ユダヤ教)

教会~現世(地上)における、神を信じる人びとの集まり(結社)

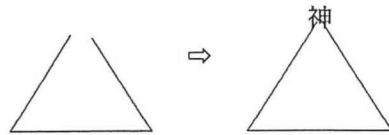
- (2) ほんとうの教会/目に視える教会 ~人間が教会をつくるという矛盾

地上での生活(→福音→教会)

↓終末

審判

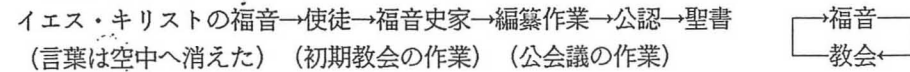
↓救済



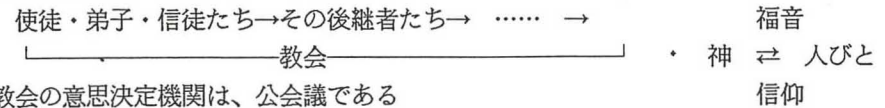
神の国での生活: 神(キリスト)を頭とする、選ばれた人びとの集まり~教会

目に視える教会(地上の教会)に属することは、救済の十分条件でも必要条件でもない

- (3) 聖書は教会を基礎づけない ~福音をそのままのかたちで知ることにはできない
パウロが書簡を書いていた段階で、キリスト教は成立していた。 Cf. 高橋敬基「発題1」~「そもそも新約聖書は、教会の制度化への途上で編纂されたもの」



- (4) 教会を基礎づけるのは、論理的に考えて、(福音に対する)信仰である



- (5) 教会の意思決定機関は、公会議である
信徒 → [選出] → 主教(各教会のリーダー) → 主教会議(公会議) ~初期
→ 大主教 → 総主教(教皇) ~後代

公会議の任務 主教会議は、ローマ皇帝がスポンサーとなった
・正統/異端 (=何がキリスト教なのか) の決定 公会議は論理的に不可謬である
・教会の組織問題の決定 ・その他

公会議はある時期以降、成立していない(∴教会分裂) ⇒ローマ教皇の権威の確立

*三位一体説は、公会議の決定 ⇒ローマ教会も改革派も、公会議の権威を認める

- (6) 教会はどのように組織されたか
・信徒/非信徒の識別~儀礼(洗礼) a~信徒、a→b: 洗礼 ⇒ b~信徒
キリスト教の洗礼であることの証明……信徒がor教会が、洗礼を施す

・聖職/非聖職の識別~叙任(任命) 教会内部の官僚組織は、ローマの軍制の模倣
聖書には、聖職をもうけるとも、もうけるなども書いてない

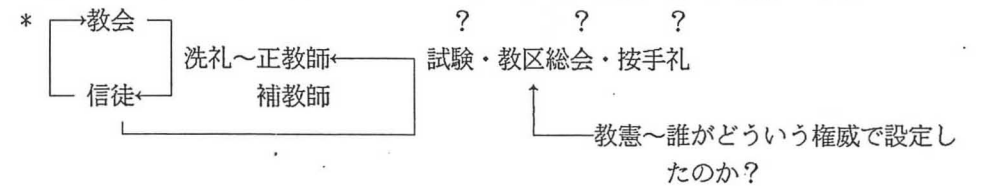
□2□ 教会は、ほかの組織とどう違うか

- (1) 仏教
 - 出家(比丘・比丘尼) サンガ(僧伽) ~律(波羅提木叉) ~加入儀礼・組織
 - 在家(俗人) 三帰依(仏法僧の三宝に帰依したてまつる) + 五戒
 - ・サンガの存在は、釈尊のこしたテキストのなかに明記されている。
 - ・正統/異端を決定する規定はない(その必要がない)
 - ・現前サンガ/四方サンガ 結集(けっじゅう): テキストの確定
- (2) イスラム教 アッラー → 使徒ムハンマド →
 - 統治権: カリフ(選挙→血統)
 - 司法権: 法学者(専門家のギルド)
 - 二重の幸福論……神は、地上の生活のために法を与え、来世の救済も約束した
 - すべての権威は神に → 法解釈の禁止 → 法源の階層制(コーラン/スンナ/イジュマー/キヤース) → 法学者の一致した判断(イジュマー)は不可謬である
 - ・聖職者が存在しないことは、聖典のなかに明記されている(教会も存在しない)。
- (3) ユダヤ教 (略)

□3□ 教会は、世俗社会や国家権力とどう関係するか

- (1) パウロの思想……地上の権威に従うべき 二王国論~世俗の王国/教会の二分
- (2) キリスト教が国教となる 王国(信仰を守る) ⇄ 教会(法律を守る)
- (3) ゲルマン民族が改宗する 戴冠: 教会が国家権力の正統性を承認する
- (4) 宗教改革の結果、教会と国家が分離する 良心の自由 国家は教会に干渉しない
……以上が、西欧のオーソドックスな教会と権力のあり方……
- (5) 明治政府は、天皇の宗教的なカリスマを国家の基礎にすえた ←キリスト教の模倣
「神道は宗教でない」~政府の公式見解 仏教徒、キリスト教徒に神道の儀礼を強制
天皇 = 「現人神」 Cf. 古代ローマの皇帝崇拜 Q. 天皇崇拜は偶像崇拜か
- (6) 日本基督教団 Cf. 大政翼賛会 教会が国家権力の強制で生まれたのなら、その強制がやんだ時点で、もとの組織に戻るの正しい

* 改革派は、信団としていくつも分立するのが本来の姿
∴公会議も、教皇の権威も成立たなければ、聖書の解釈の分岐は調停できない



- (7) どうやり直すか…… A案(日本基督教団の教憲を認める場合) ①教憲の改正案を教団総会に提出し、教憲を改正する。②過去の決定は、すべて効力をもつ。
B案(日本基督教団を残す場合) ①これまでのすべての洗礼を、信仰の名において正当と認める。②信徒の投票で、代議員を選出する。③代議員が新しい教憲を制定する。
④手続き①~③を定める規則を、現在の教団総会で定める。
C案(日本基督教団にこだわらない場合) ①日本基督教団の教憲の正統性を否定する。
②信徒と自覚するものが集まって、新たにいくつかの教会を形成する(あるいは、形成しない)。……

ピースボート つながるゼミナール
於：早稲田奉仕園

個人が民主主義で
つなぐ〜か〜る

1992. 10. 31
橋爪大三郎

□1□ 講師紹介……はしづめだいさぶろう 1948年生まれ。社会学専攻。主な著書に、「冒険としての社会科学」（毎日新聞社）～憲法を素材に、社会の成り立ちを考える
「現代思想はいま何を考えればいいのか」（勁草書房）～バブル以後の日本思想を考える
「民主主義は最高の政治制度である」（現代書館）～市民社会と国家の関係を考える

□2□ 民主主義とはなんだろう

- (1) democracy = 民衆の政治 ギリシャの昔から「衆愚政治」と訳され、マイナス・イメージをひきずる言葉だった。よい意味になったのは、つい最近。
←→theocracy = 神権政治 神（の権威を代表する宗教者）による政治
monarchy = 君主政治 aristocracy = 貴族政治 ↳変種～皇帝教皇主義
そのほかに、寡頭政治、僭主政治など。 ～共産党？
- (2) 近代民主主義は、絶対君主制から生まれた、その亜種。 ・主権 ・法の創造
主権 sovereignty の考え方は、神の権威（教会）と国家が分離した近世に登場
- (3) 国民国家 nation state 国民（言語・文化・人種…が共通な人びと）を基礎にする
行政・軍事・外交・司法・立法・経済・貿易・警察・教育・衛生・福利などの権限
- (4) 民族自決……どの民族も国民国家を形成する権利がある 植民地解放・民族独立
問題点：国民（民族）⇔国家は相互形成的⇔民族紛争 社会主義圏は「民族の墓場」

□3□ 民主主義は、コンセンサス（人びとの合意）を追求する

- (1) 民主主義はなぜ多数決なのか？ ある学生の質問「多数決で決まったことには、絶対に従わなくちゃならないのか？」→吉本隆明さんの答え「それは多数決の前に決めておくべき」⇔無限後退 民主主義は手続きを大事にするが、手続きは完結できない
- (2) 社会契約：民主主義の出発点 人びとの合意⇔憲法（根本法規）⇔その他の法律
社会契約を結ぶのは、制度と関係なく独立した個人（人権の主体）～自然法・理性
Cf. 中世神学では、法律は、神の法／自然法／人定法（実定法）の三つに分かれていた。
民主主義は、単なる手続き万能主義でない。不変の原則が前提になっている。
- (3) 多数決≠全員一致 全員一致制～共同体～決定に参加することに価値がある
多数決～個々人の独立 →実質的なことは決められない、同意への圧力
- (4) 多数決は、「みんな仲よく主義」とは異なる 良心：自分の価値観に忠実なこと
多数意見←→少数意見 多数意見は必ずしも正しくない～少数意見の尊重
- (5) コンセンサス……異なった価値観、異なった判断をもつ人びとが、討論・相互理解・妥協を通じて多数派を形成すること
政治制度（議会制）もジャーナリズムも、コンセンサスの形成を目的にしている。
- (6) 〔定義〕政治：関係する人びと全員を拘束するようなことがらを決定すること
・政治は不可避である ・政治制度（国家）も不可避である ・政治参加も不可避
民主主義は、それ以外の政治制度に比べて安定である 他の制度←民主化要求

□4□ 民主主義は、世界を救えるか

- (1) 民主主義の前提：人びとは人間として平等（ヒューマニズム）⇔伝統からの解放
Cf. それ以外の政治思想……儒教：統治者≠被統治者、ヒンドゥー教：カースト差別。
- (2) 実際には民主主義は、国民国家を単位に実現する 国民の、法の前平等
⇔各国国民の間の不平等を放置
- (3) 各国民の不平等……①資源配分の不平等 国土、人口、自然条件 } 初期条件の
②歴史的条件の不平等 資本、教育、科学技術 } 不均等
→だが、国際的な不平等を解決するための、政治的枠組み（世界政府）はない
○国際貿易（商品の移動） ○国際的な情報の流通 △人的移動 ×無条件の再配分
- (4) 民主主義以外の解決の枠組み
・国際共産主義……国家の廃絶、私的所有の廃絶、必要に応じた分配
しかし中国共産党は先の14回党大会で規約を改正、国際共産主義の旗を下ろした
・イスラム原理主義……イスラムの大義（国民国家の枠に反対）、コーラン中心主義
財の抛出と再配分は神の命令 イスラム共同体（ウンマ）は人類大・地球大
- (5) 国際紛争にどう対処するか
①東西冷戦型～力の均衡～集団安全保障・核抑止力～紛争の顕在化（戦争）を回避
②国家・対・国家～イラクのクウェート侵攻～大国（国連軍）の介入～国際法の発動
③民族紛争～内乱型～武装ゲリラの対立と無政府状態～外国（国連軍）の介入～PKO
④南北対立型～南北の不均等～紛争を顕在化する方法がない
①は、過去のものとなった。②、③は、国民国家の枠内で問題「解決」をはかる。
⇔世界政府が存在しない以上、各国の問題解決能力を高めていくしかない。
- (6) アジア諸国（日本、韓国、北朝鮮、中国、ベトナム）で民主主義が確立するなら、この地域の問題解決能力と安定度は大いに拡大する。

□5□ 日本で民主主義をどう築くか

- (1) 言論に対する信頼（思想の確立） ←→日本の伝統～人間関係に対する信頼
- (2) 制度を造るという意味 派閥←中選挙区制←戦前の政治力学（保守党の都合）
- (3) コストを払うという意識 ×市川房枝主義 ×社会党の党員百万人計画
- (4) まともな民主主義が育っていないということは、日本の政治文化がそれだけ未熟だということである。自民党、社会党、公明党、共産党、みな民主主義の原則に忠実でない。若い世代の人びとが、とりあえず少数意見としての良心に目覚めることが出発点となるのではないか。

□0□ 講師紹介……はしづめだいさぶろう 1948年生まれ。社会学専攻。主な著書に、「仏教の言説戦略」(勁草書房)～仏教を、言語と言語を超えたものとの運動と捉える「はじめての構造主義」(講談社現代新書)～構造主義を西洋近代の自己批判と捉える「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)～憲法を素材に、社会の成り立ちを考える「現代思想はいま何を考えればいいのか」(勁草書房)～バブル以後の日本思想を考える「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)～市民社会と国家の関係を考える「小室直樹の学問と思想」(弓立社)～ソ連崩壊予言を、社会科学の総合力で分析する

□1□ 国際化とはなにか

- (1) international 国際的 ↔ national 国民的、一国家的、近代国家的
「国際」という観念は、近代的な意味での国民国家が、世界の構成単位となって成立
cf. 中世～普遍性(教会・ラテン語・大学・神聖ローマ帝国) + 民族性(土着国家)
- (2) ナショナリズム……普遍的な原理に抗して、国民国家が自己主張する運動
言語・文化・法律・制度・経済主権(租税、関税)・教育・人間の移動……の掌握
国民国家 nation state 国民(言語・文化・人種…が共通な人びと)を基礎にする
- (3) 日本の場合、普遍性・対・民族性の争いが、深刻に意識されることはなかった
日本～自然的(≠人為的)な境界～自覚しないまま<内>に閉じこもる傾向あり
～自覚しないまま<外>を攻撃する傾向あり
cf. 中国～周囲に人為的な境界～中国そのものが異質なものの統合(=世界=国際社会)

□2□ 日本の国際化はなぜむずかしいか

- (1) EC(ヨーロッパ共同体): ナショナリズム⇒インターナショナリズムへの道
ナショナリズムが人為的にこれえたものだから、国際機構に改造できる
↔日本の社会の場合、その意識が希薄 せいぜい「国際性」を取りこむという意識
- (2) <外>をとりこむ運動 ↔ <内>に閉じこもる運動 : 日本史の基本リズム
- ①聖徳太子の改革……四つの古代(現代)化: 農業、工業、科学技術、国防の古代化
律令(=中国の法・政治制度)の移入、均田法(=中央集権的国家社会主義経済)の移入、兵制改革、官僚制、大学制度、国分寺、……。
- ②国風文化……中国文化がなしくずしにデフォルメされていく過程
荘園制(公地公民制の否定)、武士(兵制の否定)、公家法・武家法(律令の否定)
- ③安土桃山時代……西洋との接触: 鉄砲、キリスト教、工芸品、…… 信長に刺戟
秀吉は、日本をそのまま中国に拡大しようとする(元寇の裏返し) 日本=夷狄
- ④鎖国……鉄砲と儒教によって、キリスト教(に象徴される西洋文明)を排斥
暗黙裡に<外>を意識した、<内>への閉じこもり 日本的なるものの再生産
- ⑤明治維新……尊皇攘夷勢力が開国に転ずるパラドックス 西欧近代文明の受け入れ
当時は、ちょっとだけ開国して国力をつけ、また鎖国するつもりだった?
- ⑥大東亜共栄圏……西欧文明の排撃 国粹主義 ウルトラ・ナショナリズム
しかし、そうした反西欧的なスタイル自身が、西欧的なもののひき写し

⑦戦後民主主義……アメリカの制度(政治、教育、文化、経済、科学技術、国防、……)の移入 反米主義～左翼～社会主義の奇妙な結びつき

⑧国際化の時代……コンプレックス(対欧米)/優越感(対第三世界)のないませ
<外>と接触するほど<内>に閉じこもりたくなる、という逆説

(3) 日本人は、異なる民族との深刻な摩擦を経験していない →基礎的な条件の欠落
←文明(国際的な文化・社会制度): 民族の摩擦を前提に、それを乗り越える工夫

□3□ 日本人は国際化のために、なにをしたらいいか

- (1) 勘違いの国際化=<外>との接触の割合が増えること 結果⇒やっぱり日本がいい
①外国語ができるようになる ひとつの手段にすぎない 外国語=英語?
②外国に旅行する →すぐ日本に戻ってくる(お客さん)
③外国の事情(文化、思想、風俗)に明るくなる 情報ギャップに寄生する商売
①～③のようなことが評価されるのは、<外>が稀少である社会(つまり<内>)にはかならない。ということは、国際化と正反対のロジックが支配する社会だということ。
- (2) 日本固有性・独自性に気がつく 自分がなにものであるか知る→他者と関係がとれ、他者を尊重できる→相互理解と交流ができる 国際語としての日本語(政策)
- (3) 過去を十分に振り返る 歴史: 自分をどのような過去が規定しているか～無意識戦争責任～賠償問題 従軍慰安婦、軍票、残留孤児、戦争責任、歴史記述、補償など
- (4) 異文化について理解を深める ⇒自文化を相対化し、その根拠を問い直す
- (5) 日本にいる外国人について、きちんと対応する 在日韓国・朝鮮人などの「市民権」
- (6) 日本の社会制度を、国際規格に合うように手直しする
大学(人事の国際化、9月入学、単位の互換制)、政府(許認可行政の廃止、人事の流動性)、企業(雇用慣行の見直し)、地域(外国人を想定した見直し)、……
- (7) 日本人の行動原理を、国際社会に適合的なように改める
・日本人の行動原理:<内>の問題解決 問題の所在や状況を理解できる、価値観を共有する人びとのあいだでの紛争処理
↓
・脱日本的行動原理:<外>に通じる問題解決 <内>に閉じないようにするため、つねに<外>のメンバーがもう一人そこにいると考えて行動する。

□4□ さらに具体的には……

- (1) 日本の国際戦略の構築 アメリカを、ECとともに補完する勢力としての東アジア
日本は、その中心として、世界の安定に責任を持つ
- (2) アジアの共通項を模索する(大東亜共栄圏の総決算) 中国・韓国との対話
- (3) 国際機構の設計 地球環境保護(特に炭酸ガス)の枠組み 国際通貨・金融・援助の枠組み 国連の改組 拡大常任理事国(五大国+拒否権のない日独)制
たとえばエコライト (排出権) 構想
- (4) 日本の労働組合は、<内>の原理(企業別)に圧倒されてきた。→<外>の権利を保障する運動に、脱却してもらいたい。

「古典で学ぶ社会科学」

- 講師紹介：橋爪大三郎（はしづめ だいさぶろう 1948- ）
 1972 東京大学文学部社会学科卒業
 1977 東京大学大学院社会学研究科博士課程修了、のち執筆に専念
 1989 東京工業大学工学部で、一般教育の社会学を担当
 ・著書 1985 「言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン——」
 1986 「仏教の言説戦略」 勁草書房
 1988 「はじめての構造主義」 講談社現代新書
 1989 「冒険としての社会科学」 毎日新聞社
 1991 「現代思想はいま何を考えればよいのか」 勁草書房
 1992 「民主主義は最高の政治制度である」 現代書館
 1992 (+副島隆彦) 「小室直樹の学問と思想」 弓立社……ほか

1 ホッブズ ——社会科学の出発——

- 1.1 ホッブズ (Thomas Hobbes 1588-1679) : 英国の哲学者、思想家
 1603-1608 オックスフォード大学で、論理学・スコラ哲学を学ぶ
 1620- フランシス・ベーコンの助手を勤める
 1629 トゥキディデス「歴史」を翻訳 1640「法学要綱」1642「市民論」を出版
 1640-1651 清教徒革命の混乱を避け、パリ亡命。「リヴァイアサン」を執筆
 1655「物体論」1658「人間論」1668「ビヒモス」出版
- 1.2 「リヴァイアサン」 (Leviathan 1651) 序説 (資料 1-1)
- 1.3 「リヴァイアサン」第13章「人間の自然状態、その至福と悲惨について」 (資料 1-2)
- 1.4 参考 (資料1-3)……「逆説としての権力」より抜粋。JICC出版局より、「佇立する身体」(仮題)として、93年1月に出版の予定。
- 1.5 参考文献
 Hobbes, Thomas 1961 Leviathan or the Matter, Forme and Power of a Commonwealth Ecclesiasticall and Civil →1968 Penguin Books.
 水田洋・田中浩訳 1974 「ホッブズ・リヴァイアサン (国家論)」 (世界の大思想 9) 河出書房新社
 永井道雄 1979 「ホッブズ」 (世界の名著28) 中央公論社 ←抄訳

2 マルクス

- 2.1 マルクス (Karl Marx 1818-1883) : 哲学者、経済学者、思想家。マルクス主義の祖。
 1818.5.5 プロイセン (今のドイツ) に生まれる。両親ともにユダヤ人。
 1835 ボン大学法学部入学
 1836 姉の友人イエニーと婚約
 1939 ヘーゲル左派のフォイエルバッハラと知り合う。
 1841 イェーナ大学から哲学博士号を受ける。学位論文「デモクリットとエピック

ールの自然哲学の差異」

- 1842 大学講師の道をあきらめ、「ライン新聞」編集長に就任。
 1844 「独仏年誌」に「ユダヤ人問題によせて」などを発表。「経済学・哲学草稿」を執筆。
 1845 エンゲルス (Friedrich Engels) と協力関係を結ぶ。「フォイエルバッハ・テーゼ」「ドイツ・イデオロギー」を執筆。
 1848 「共産党宣言」(共産主義者同盟・綱領) 発表。
 1849 ロンドンに移住する。生活難のなか、経済学の研究を進める。
 1859 「経済学批判」第一分冊の原稿完成。
 1867 「資本論」第1巻刊行 (初版1000部)
 1883.1.11 ロンドンで病死。
 1885 「資本論」第2巻、エンゲルスの編集によって刊行。
 1894 「資本論」第3巻、エンゲルスの「序文」をつけて刊行。

- 2.2 「経哲草稿」 (資料2-1) ——人間疎外の哲学——
 ここで登場する重要な概念……類的存在 (類的本質)、労働、生産、疎外

* そのほかの重要な概念……弁証法、プロレタリア、再生産、分業、私有財産

2.3 参考文献

- Marx, Karl 1844 "Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844" →1973 Karl Marx Friedrich Engels Werke Ergänzungsband Erster Teil :465-588. Dietz Verlag.
 Marx, Karl 1844 →1975 "Economic and Philosophical Manuscripts(1844)" Early Writings, Penguin Books.
 マルクス著・城塚登・田中吉六訳 1964 「経済学・哲学草稿」岩波文庫。

2.4 「共産党宣言」 (資料2-2) ——階級闘争の歴史——

重要な概念……社会主義、共産主義、ブルジョワジー、階級闘争

そのほかの重要な概念……前衛党、革命、プロレタリア国際主義

2.5 参考文献

- Marx, Karl; Engels, Friedrich 1948 Manifest der Kommunistischen Partei, →1969 Reclam.
 Marx, Karl; Engels, Friedrich 1948 =1888→1985 The Communist Manifesto, Penguin Classics.
 マルクス・エンゲルス著 大内兵衛・向坂逸郎訳 1951 「共産党宣言」岩波文庫。

2.6 「資本論」 (資料 2-3) ——資本主義の解明——

重要な概念……資本家的生産様式、商品、交換価値 (あるいは単に、価値)、使用価値、生産手段、利潤、

そのほかの重要な概念……剰余価値、商業資本、産業資本、金融資本、国家独占資本主義、地代、労働価値説

2.7 参考文献

- Marx, Karl 1867 Das Kapital (Erster Band) →1947 Dietz Verlag.
 Marx, Karl 1867 →1976 Capital (Volume 1), Penguin Books.
 マルクス・エンゲルス 鈴木鴻一郎訳 1980 「資本論」 (中公バックス世界の名著 54.55)、中央公論社。

3 ウェーバー —「資本主義の精神」とは何か—

3.1 ウェーバー (Max Weber 1864-1920) ドイツの社会学者、思想家。

1864. 4. 21 エルフルトに生まれる。
 1882-86 ハイデルベルク・ベルリン・ゲッティンゲンの各大学で、法律学をはじめ、歴史学、経済学、哲学を学ぶ。
 1886-89 ベルリン大学で、法制史、農業史の研究を続ける。
 1889 「中世における商事会社の歴史」でベルリン大学の博士号を取得。
 1893 マリアンネと結婚。
 1894 フライブルク大学教授 (国民経済学) に就任。
 1897 ハイデルベルク大学教授 (国家科学) に就任。
 1898-1902 神経疾患に悩まされ、研究・教育は不可能となり、イタリアで療養生活を送る。1903年、正式に大学を辞す。
 1904 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」」などの論文を発表。
 1909 「古代農業事情」を発表。
 1911-1913 「経済と社会」後半の原稿を書き下ろす。
 1914 第一次大戦勃発。陸軍病院で軍務につく。
 1915-1917 宗教社会学の研究にかかる。
 1918 ウィーン大学の客員教授となる。
 1920 肺炎のため急死。

3.2 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」」 (資料 3-1)

重要な概念……プロテスタンティズム、禁欲、世俗内禁欲、天職、エートス、倫理、恩寵、

そのほかの重要な概念……カトリック、ルター派、カルヴィニズム、救済予定説、脱呪術化

3.3 参考文献

Weber, Max 1920 "Die protestantische Ethik und der > Geist < des Kapitalismus", Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1 :17-206. =1988 大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫。

4 毛沢東 —中国革命とは何か—

4.1 その後のマルクス主義

レーニン「国家と革命」……プロレタリア独裁、民主集中制
 「帝国主義論」……植民地主義と帝国主義戦争、世界同時革命
 スターリン「レーニン主義の基礎」……五ヶ年計画、集団農場・国営農場

4.2 毛沢東 (Mao Ze Dong 1893-1976) : 中国の革命家、思想家。

毛沢東 Máo Zé dōng マオ・ツォー・トン
 1893~1976 中国革命の指導者。湖南省の農民の家庭に生まれる。中国共産党創立 (1921) に参加。以後、北伐、国民党との闘争、抗日戦争を通じて、一貫して中国の解放と独立への道を歩み、1940年頃から党の最高指導

⇐見田宗介ほか 1988
 「社会学事典」弘文堂
 p. 824

者の地位を占める。戦後の国共内戦に勝利し、中華人民共和国主席に就任 (~1958)。また死に至るまで党主席の地位にあった。彼はマルクス・レーニン主義に依拠しつつ、中国の革命が実質上は農民革命であることを洞察し、独自の根拠地論あるいは「農村から都市へ」といった戦略を打ち出して革命を勝利へと導いた。晩年、文化大革命 (1966~

76) を発動し、全国に動乱をひき起したが、「毛沢東思想」はなお党の指導思想の一つとされている。『実践論』『矛盾論』(1937)、『新民主主義論』(1940)、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』(1957) などの著作がある。 —新民主主義、文化大革命

(野村浩一)

〔選集〕北京・外文出版社版『毛沢東選集』全5巻、東方書店、1968、77。

- 4.3 「矛盾論」(1937) → 「毛沢東選集」(1951) 第1巻 299-340頁 = 毛沢東選集刊行会訳「矛盾論」「毛沢東選集」第3巻9-66頁、三一書房。(資料 4-1)
 「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」(1957) → 「毛主席語録」

重要な概念……矛盾、唯物弁証法、主要な矛盾、敵対関係、人民内部の矛盾

そのほかの重要な概念……人民公社、プロレタリア文化大革命、紅衛兵、造反有理、愚公移山、走資派、下放

5 丸山眞男 —日本近代化の課題—

5.1 丸山眞男 (1914-) : 戦後日本の政治学者、思想家。

丸山眞男 まるやまさお 1914~ 政治学者、政治思想史学者。江戸儒教の展開を分析し、自然と倫理を連続させて考える思想状態から、その乖離と近代的主体意識の出現へと至る過程を示した。また日本思想のもとにある「古層」分析も行っている。規範意識とそれによる行動の自律により近代人を定義する立場は、思想史のみでなく近代日本政治の分析と批判につらぬかれている。戦後近代主義を代表する思想家のひとり。また平和問題談話会などを通じ政治的啓蒙に努めた。 —近代主義 (杉山光信)

⇐見田宗介ほか 1988
 「社会学事典」弘文堂
 p. 839

主な著書

「日本政治思想史研究」東大出版会
 「日本の思想」岩波新書
 「『文明論の概略』を読む」岩波新書

- 5.2 「超国家主義の論理と心理」1946 → 「増補版 現代政治の思想と行動」(資料 5-1) 未来社

重要な概念……超国家主義、中性国家、外部/内面、私的領域、抑圧委譲

そのほかの重要な概念……作為の契機、「である」ことと「する」こと

5.3 そのほかの戦後知識人

大塚久雄、川島武宜、清水幾太郎、……

* レポートを提出して、成績を評価します。提出期日、題目は、1月6日に教室で発表します。締切り期日に遅れないように注意して下さい。